In April 2022, Osaka City University and Osaka Prefecture University marge to Osaka Metropolitan University

Title	一般的知性の住まい：アントニオ・ネグリとの対話、現代<大都市>に住まうことについて
Author	ネグリ, アントニオ / トマゼッロ, フェデリーコ / 北川, 眞也[訳]
Citation	空間・社会・地理思想. 21 巻, p.151-162.
Issue Date	2018
ISSN	1342-3282
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	Publisher
Publisher	大阪府立大学大学院人間社会システム科学研究科
Description	http://www.euronomade.info/?p=5228, Lug 16, 2015
DOI	10.24544/ocu.20190401-018

Placed on: Osaka City University

Osaka Metropolitan University

空間・社会・地理思想 21 号，151-162 頁，2018 年
Space, Society and Geographical Thought

一般的知性の住まい
――アントニオ・ネグリとの対話、現代〈大都市〉に住まうことについて――

アントニオ・ネグリ *、フェデリーコ・トマゼッロ **
（北川眞也 *** 訳）

Federico TOMASELLO
L'abitazione del general intellect. Dialogo con Antonio Negri sull'abitare nella metropoli contemporanea
http://www.euronomade.info/?p=5228, Lug 16, 2015

フェデリーコ・トマゼッロ

一年前に、「社会的協働のコミューン」［2014年1月］、それに続いた「〈大都市〉のコモン的なる肺」［2014年6月］（双方ともエウロノーマデEuroNomadeのウェブサイトで公表されました）のインタビューで開始された、〈大都市〉についての会話を続けましょう。

さらに分析を押しすすめるために、私たちがそこから話をはじめた理論装置を、まずはあらためてとりあげておきたいと思います。君の格言によるものですが、それは、かつて労働者階級に対して工場が存在したように、こんにちではマルチチュードに対して〈大都市〉は存在している、というものですね。固定資本と「仕事場」を襲ってきた数々の変容を調査することで、工場と〈大都市〉のあいだのこのアナロジーのいくつかの新たな側面を詳しく説明してくれないでしょうか。

一般的知性general intellect[訳注1]の労働の一部が、こんにちでは住まいの内側で生じている、家そのものが何かしら仕事場へと生成していることを擁護するのは、今では当然のことでしょう。君の〈大都市〉についてのパースペクティブのなかに、この要素はいかにして位置づけられるのでしょうか？　工場のパラダイムと現代の〈大都市〉現実とのあいだのつながり、断絶についての分析を、労働の価値生産の諸契機が生じる場所とされた家の内側でも行うことは可能でしょうか？　家というミクロな次元、住むこと、住まいをおりなすテクノロジーというミクロな次元から出発しても、工場／〈大都市〉のアナロジー――価値生産メカニズムの〈大都市〉テクスチュア全体への拡大――を同じように採用することはできるのでしょうか？

アントニオ・ネグリ

非常に一般的な質問です。そのような質問に答えるには、何らかの推論がいつも必要ですね。しかし、それによって対象へと接近することができるでしょう。

こうしてはじめるにあたり、思いだすのは、レム・コールハースがディレクターを務めたヴェネツィア・ビエンナーレ国際建築展［2014年］を一年前に訪れたときのことです。私はそこで、展示の行程にそって広がるプログラムの解説文に遭遇しました。それは、ある種の「住居辞典」のようなものでした。私たちの日常生活の欲求を解釈し、それを組織している機械物品（蛇口からエレベーターまで）の百科全書であったとも言えます。この「辞典」が示そうとしていたのは、「建築要素はどこで機械へと生成するのか」、という問いでした。

続いて、私は1969年の驚愕すべき展示のことを思いだしました。それは「態度がどこで形＝フォルムへと生成するのか」[訳注2]と題された展示です。これはいまバーゼルからヴェネツィアへと運ばれてきており、プラダ財団のなかに展示されています。その展示では、作品、想像力、情感というものが、想像力と欲望を最大限に抽象化した形＝フォルムの図像（記号、集積、トポグラフィーなど）となっているのです。

さて、今回のビエンナーレで（しかし、一般的にはここで私たちが語っているテーマにとって）考察対象とされた「態度」とは、それとは非常に異なったものです。たとえ態度が表現される情念や形＝フォルムへの言及は有益であるとはいえ。今回の「態度」というのは、居住して、生活と労働のために、住居機械を利用する人びとの態度のことです。それは今や、芸術生産が機械状に抽象化される事態との対応関係のなかに位置していると言えるでしょう――ボルタンスキーとシャペロがかつて論じたように。そ

＊　政治思想家
＊＊　フィレンツェ大学
＊＊＊　三重大学

れゆえ、極めて具体的な水準で生活すること、労働することが、形＝フォルムへと生成しているわけです。それは、価値の新しい形＝フォルムであると言えるでしょう。

実際のところ、客観的な視点から住まいについて論じるさいには、まずは二つの要素に留意しなければなりません。その二つというのは、形＝フォルムへと生成する態度と、機械へと生成する建築要素です。主体性の視点から住まいについて考えるさいには、これはなおさらあてはまります。つまり、社会のデジタル化と都市のコンピュータ化を通じて、ある種の状況においては、家のなかで仕事を行うことが可能なのです。その状況というのは、建築要素とコミュニケーション・ネットワークが住まいそのもののテクスチュアの内側へと移植されている状況にほかなりません。都市が、労働と関係する無数の時間、無数の異なる時間性を有しているのであれば、それは労働力のプレカリティとモビリティのみならず、住まいのただなかへとコミュニケーションが物質的に浸透していること、住居のなかで特異性が生みだされていることにもまた原因があるのです。一般的知性は家に住みつき、家を見出したというわけです。でもそれは悲惨な住居ですね。

1973年の危機以来、都市のリズムはフォード主義のそれ――つまり、三つの8時間。労働、余暇、休息の三つ。そして、このシークエンスにしたがって組織された交通と売春宿――ではもはやありません。都市のリズムは、労働の協働が都市において全般化する状況、そして労働者自身が労働を新たに管理する状況と結びついたものとなっています。工場は、住まいのなかに移転したのです。工場のなかの旧来の仕事場と、住まいが新たな仕事場の「容器」へと生成する状況とのあいだで生産される隔たりを分析しなければなりません。それは、現代の諸々の生の形式を調査することと同義であると思います――もし生産がいまや生の諸形式と完全に結びついているのなら、このように言えるのです。

労働の諸形態と生の諸形式とのあいだの親密で内奥からの結びつきは、とてつもない結末を伴うものです。それは特に、労働がなされる方法を変更してしまいます。というのは、君が自分の家にいて、そこで自律的なやり方で労働を行うとき、抽象的協働の領域のなかで仕事をしていることになるからです。抽象的協働というのは、工場で実行されていた身体的・物理的隣接性とは完全に異なるものです。身体的隣接性に基づいて、経営者＝支配者は、規律訓練disciplinaを行使することができました。抽象的協働に対しては、最大でも制御controlloを行使しうるのみでしょう。今や正確な指示と連続的な諸規定に基づいて労働はまったく行われません。労働はむしろ、自由をもたらすある種の領域、生と労働の混成、つまりは住まいそのものによって配置され、整えられた自律的な計画設計装置の内側で行われるのです。もちろん、家を避難所とすることに成功するときもあるでしょうが――その難しさを述べるためだけに、このことを強調しておきます。

トマゼッロ

ジル・ドゥルーズは、フーコーによる省察のいくつかの部分を再読することで、当初はまさに場所、時機、具体的な制度にだけ位置した諸々の要素が、社会的連環全体にそって脱配置されていく諸過程を読解する非常に的を得たパラダイムを提出しました。これは――かつて、あるいは今も君が言うように――規律訓練から制御への変転というラベルのもとで概括できるパラダイムであると思います。

君の意見では、このパラダイムは、工場／〈大都市〉について、また住まいが「仕事場へと生成する」状況について論じることで、私たちが動員してきた様々な要素を記述し、再び確証させられるものなのでしょうか？

ネグリ

規律／制御のこの重なりあいは、物事を読解するうえで、有益で重要な鍵でした。しかし、生政治的なものを今や侵略した搾取の諸形態に対峙して、それは何かしら乗り越えられてしまいました。いわゆる制御の諸作用は、労働の生政治的姿態を先取りするものであったと言えるでしょう。この視点に立つなら、こんにちでは「生–政治的な」制御について論じることができると思います。そこにおいては、ビオスに対して強勢が置かれます。したがって純粋な制御によるそれよりもだいぶ幅の広い一連の性格規定に対して強勢が置かれているわけです。

ここにおいて、これらにはっきりとした明確な区別を設けることは非常に困難です。なぜなら、生のまわりを取り囲む機械状道具も、福祉の仕組みや貨幣的諸条件も、同一のプロセスのなかで交差しているからです。だから、媒介なしに、工業的な規律訓練と生政治的制御とのあいだの区別に、それらを直接還元することは難しいわけです。

これを前提としたうえで、以下のことが付け加えられねばなりません。それは、この傾向――非常に漸進的に、今では現代的に展開されている――が、家事諸活動がなされるさいのパラダイムであること

を示す一方で、ポストフォード主義の価値増殖が生政治的次元と交差するときには、さらに込み入ったかたちで――またどこにおいても――姿をあらわすということです。プレカリ化する労働の諸形態と賃金面の貧窮をもたらす諸条件――恐怖とインセキュリティの雰囲気において――が、労働者に課されているわけですが、このような危機の局面においては、この「特別な」制御のもっともあからさまな形態を記述することができるでしょう。生きることと生き延びることが、ここにおいては同一視されるのです。仕事場、また労働手段としての住まいは、借金の場所へ、もっとも貪欲で致死的である金融に基づいた搾取の場所へと生成するわけです。欲望の拡大と生産の新たな実践の領域としての生政治的なものは、生の監獄となる、さらには破壊的力となるのです。

ここで、以下のことを思いだすのは無駄ではありません。かつて「家事労働に賃金を」[訳注3]という目的のもとに集まっていたフェミニストの諸理論と活動家たちは、かなり以前に、生政治的なもののこの両義性、破壊的なものとなりうるこの両義性を理解し、記述していました。生政治的なものが社会的生産労働の中心地点となるはるか以前に、この女性たちは、労働者賃金という家父長制構造のなかに、家事労働という奴隷制のなかに(フォード主義の賃金構造と、それの家族生活との同居という不正な構成のなかに)、生政治的なものの制御がもたらす複雑さを感知していたのです。当時、彼女たちは、闘争でもって、社会領域の全体において賃金配分の再編成がなされるよう強く求めていました。社会領域の全体において、女性労働が本質的なものとなっており、またそのようなものとして認識されなければならないと。賃金と権利は、生存を保証するためのみならず、いっさいが利潤と結びついた社会においては、解放emancipazione[同一性の解放]のためのものでもあったのです。

彼女たちはそれに成功したのでしょうか？　それは論点ではありません。この例は、ポストフォード主義において、新自由主義の時代において、搾取と生政治的制御をめぐる諸条件が、どれほど複雑なものとなってきたのか、そして敵対性がどれほど深いところから生起するものとなってきたのかを示すうえでもっぱら有益だったのです。

トマゼッロ

以前には工場にあったいくつかの契機が、このように住まいの内側へと移動しているわけですね。では、ここに〈大都市〉にかんする君の言説の鍵となる二つの要素を据えつけてみたいと思います。それというのは、現代の〈大都市〉現実に内在する両義性についての問いです。

認知労働の一部が家事へと生成しているわけですが、〈大都市〉のテーマは、このなかへと「装置」を組み込むため、つまり一方では個体化と搾取をもたらすわけですが、他方では特異化と自律性をもたらす「装置」を組み込むために利用できるものだと思いますか？　それに続いて私が考えるのは、〈大都市〉の労働者たちによる固定資本の再領有という問いです。家のなかで生じている生産の諸契機の内部において、君はこのテーマをどのように展開するつもりでしょうか？

ネグリ

この議論の内部で、労働者による固定資本の奪回あるいは再領有について論じることは、以下のようなときにこそ、意味を獲得するでしょう。ひとつは、住まいのなかに、労働の協働全体、協働の流れを計画立て、それに参加することを可能とするテクノロジー手段が存在していることが強調されるときです。もうひとつは、これらのテクノロジー手段が、工場の外部へと、家へと「再配置」されて、まさしく労働者によって部分的あるいは全面的に再領有されてきたことが強調されるときです。機械へと生成した建築構造が単純に問題なのではありません。住まいの機械状構造もまた問題なのです――ここから一連の様々な結末を引きだすことができるのではないでしょうか。

一つ目は、独自に家事にかかわる労働についてのことですが、これに関しては、後ほどすぐに戻ってきましょう。二つ目は、家が機械化されることです。これは、一つ目と密接に結びついたものです。考えてみてください。家とは何であったでしょうか？――100年前ではなく、50年前の家のことを言っています。住まいに機械など存在しておらず、いっさいが家事労働に従事する人によって準備されていました。機械を備えていなかった住まいの内側では、女性が苛酷な毎日の繰り返される労苦を強いられていたのです。それは愛、愛情というかたちのなかに隠されていました。しかし実際には、それは実質的な労働、物質的かつ非物質的な労働、情動的かつ奴隷的な労働にほかならなかったわけです。それは食事の準備から、機械の助けなしで行うにはもっともつらい仕事――たとえば洗濯――にまで及びました。もちろん子育てもそうでした。

こんにち、この文脈は完全に変化しました。重要

なことですが、女性解放のプロセス、全般に及ぶ機械状変容があったのです。後者はそれゆえに、その肯定的、進歩的な特徴のなかで把握されなければなりません。これは、家族空間、家族関係に実質的な変更を引き起こす変転であるわけです。つまり、女性の解放は、機械状諸要素を参照することでこそ、引き起こされはじめるというわけです――たとえそれが政治的言説となって、情動構造の内部に、主体性に介入するまでは、まったく部分的なやり方でしか引き起こされないのは明らかだとしても。

ただいずれにしても、このプロセスのなかで、解放の物質的可能性が与えられ、それが住まいのなかで固定資本が女性によって再領有される事態を通して進展していることは、はっきりとしています。もちろんこう述べることで、このような解放空間を切り開くと同時に、その空間を消費のもとへとさらす資本関係の両義性を隠したいとか、煙に巻きたいとかいうわけではありません。この両義性は、フォード主義からポストフォード主義への経過全体にそって作用していると思われるものですね。それは、賃金構造に内在する両義性、そしてここにおいては、労働過程のなかで住まいによって果たされる固有の役割を暴露する両義性であるわけです。

しかし、その空間は脱本質化されてもいます。それは、ジェンダーによって、女性であることによって、夫の賃金への従属によってのみでは、もう単純には固定化されない関係がもたらす潜在性へと開かれています。家族の奴隷状態であるという姿やその継続状態に単純に比例することのない関係の潜在性へと開かれているのです。この空間は、自由の空間ではないでしょう。しかし、もっぱら解放［同一性の解放］の場ではあるのです。

トマゼッロ

〈大都市〉は、不動産目的による負債化メカニズムが、もっとも激しい性向を有している場所でもあります。またそれゆえに、そこでは、こうした領域でがんばる数々の闘争がいっそう意義深いものとなっているわけです。私は、バルセロナの住宅ローン被害者プラットフォームPAH[訳注4]――それはとてつもない闘争です。その重要性は、市長戦におけるアダ・クラウ[訳注5]の勝利に寄与するものでした――のような経験のことを思い起こしています。金融資本に対するこれらの闘争について、さらに付け加えることはありませんか？

ネグリ

こうして、私たちは問題の中心にたどりつくわけですね。それは、資本の新たな関係のただなかでの主体形成というテーマにほかなりません。この主体形成は、住まいが仕事場となったときには、住まいを直接に巻き込むこととなるわけです――つまるところ、住まいは、搾取の場所であると同時に、起こりうる解放の場所でもあるということです。

このケースにおいては、堅固な二面性が存在していると言えます。それは、搾取をめぐる二つの性格に対応するものです。この搾取の性格というのは、生産的で自律的ですが、搾取され疏外もされる労働――一般的に言えば、ポストフォード主義の労働――の枠組みのなかで、家事労働（社会的ネットワークのなかで、男性あるいは女性によって家のなかで行われる）を、資本が従属させるということを意味します。さてこの二つの性格というのは、ここで定義された搾取と疏外という二つの方向性のことですね。

一方には、直接的搾取があります。それは、機械化されたこの家、固定資本のなかに浸されたこの住まいのなかでやり遂げられる仕事の搾取です。他方には、価値の採掘メカニズムがあります。それは、住まいのなかに自身の主要な活動場所を認める認知的、非物質的労働者にきまって服従を強いる、負債化を通して表明される価値採掘メカニズムです。

つまり、こういうことです。一方は、資本が労働者を直接的搾取の内部に吸収するときに、かれの労働力価値が消費されるということです。他方は、協働的――社会的、知的、情動的――労働によって生産された価値を、資本が採掘する――間接的、金融的手法を通して――というわけです。

しかし、私たちの言説の筋道を取り戻して言うなら、以下のように言えます。増大する労働の自律性がいつも存在しているのだと。それは、（資本からすると）敵の役割を果たすものです。この視点からすれば、労働の解放のための闘争、労働からの解放liberazione［自由への生成］のための闘争は、この自律性を基盤とすることで、二面性を有する必要があると言えるでしょう――かつていつもそうであったように、またより高い生産力と労働者の相対的自律性を考えれば、こんにちでは、さらに劇的にそうでありうるように。一方は、搾取に対する固有の闘争で、他方は、資本主義の採掘主義に敵対する包括的な闘争です。

この枠組みは――すでに述べたように――、搾取と採掘性の数々の新しい形態によって複雑化されています。なぜなら、それらの形態は、生産するというコモン的活動――つまり、財の生産と主体性の生産

の合流、集団的な諸価値と諸々の生産的な特異性の合流――を背景にして与えられるものだからです。

もし事態がこうであるなら、おそらくは以下のことが理解されるでしょう。それは、（採掘的）搾取が、コモンの搾取にほかならないものだということです。つまりそれは、社会的に生産的な労働者たちの協働ネットワークの搾取なのです。さらに言うなら、従属させられる者、搾取される者、一般的に言えば労働者が、こうした事態を十分に了解しているということもまた理解されるでしょう。

新しい〈大都市プロレタリア階級〉の社会闘争は、目下のところ、この新たな領域において展開されているように思えます。〈大都市プロレタリア階級〉の現在の闘争は、ただちにこの領域をつかみとってきたように思えるのです。実際、一方には、社会的労働（さらには、家のなかでなされる社会的労働のために）を承認させるためのさらに重要度を増す闘争があります。つまり、賃金に手をつける直接的また間接的な徴税に対する闘争、一般化された所得（社会的労働が承認されること、さらには家事労働が承認されることを含意します）への要求があるわけです。

他方には、負債化に抗する闘争があります。とりわけ、それが住宅の取得と結びついたときです。アダ・クラウによって率いられた抵当権に抗する闘争、すなわち支払い不能の債務者に介入する罰則、借金を完全に支払うことのできなかった人によって注ぎ込まれた資産がなくなるまで介入する罰則に抗してなされたバルセロナの闘争のように。これは、直接になされた巨大な闘争――〈大都市〉の新たな感情――です。そこにおいては、もはやただ立ち退きに抗する防衛があるだけではありません。そうではなく、「制度レヴェルの」搾取者たち、裁判官たち、執行官たち、立ち退きを実行させる警察、第一級のそれを含む金融業者たちによって果たされる役割の階級的性格が、白日の下に曝されているわけなのです。

それゆえ、この闘争は、包括的なやり方で行われているのです。つまり、特殊な財を守ることではなく、コモンを守ることと結びついているわけです。ここにおいては、労働者と資本家のあいだで、コモンをめぐる挑戦の力が試されているのです。

トマゼッロ

〈大都市〉という観念は、独自の「空間の生産形態」にもまた言及するものですね。そこでは、近年流行の都市的なるものについての言説、都市テクノロジーによる領域[＝地域]の植民地化プロセスにかんする言説が交差しているわけです…。

ネグリ

…私には、これらの問題系は、特殊な諸問題を単純に目立たせることで理論を構築しており、誤ったやり方で提出されているように思えます。問題が特殊であるとするなら、理論もおそらくはいつも特殊なものとなるでしょう。それゆえ、一方において、都市はブルジョア・イデオロギーのなかで（また大多数の建築家の頭のなかで）、投機と不動産レントの意のままとなる広大な用役として姿をあらわします。〈大都市〉――あるいは一般的には都市――は、植民地化のなされる土地、または、以下のような空間性が生産される土地となるわけです。それは、階級的基準にしたがってヒエラルキー化され、分割された空間性です。それはしかも、都市的搾取の大事業ならびに規模の巨大さを通して成し遂げられるのです。

この事業は、第一に、「ジェントリフィケーション」という形態のなかに体現されます。それは、都市空間における／のトポスの脱領土化とヒエラルキー化のたえざる諸過程を通して有力なものとなるわけです。こうして、採掘の暴力が決定的なかたちで行使されることを通じて、これらの空間には、ほとばしる本源的蓄積のような実質が具現されるのです。このいっさいが、〈大都市〉における投機を理由とした金融への偏好によって引き起こされているのです。

しかしながら、第二に、これらの新しい都市的諸過程を、ただ資本家の観点からのみならず、労働者の観点から考察するなら、いくつかのことが変化します。思うに、アンリ・ルフェーヴルは、1970年代に労働者によって都市へとなされていた提案を直感的に理解したのでしょう。そうですね、「都市への権利」についての彼の言説は、明らかにフォード主義時代の言説だったわけです。それゆえ、おそらくこんにちでは不十分なものでしょう。けれども、それはマクロな都市計画と、住まわれた空間のミクロな社会学とのあいだに、どんな深いつながりが存在するのかを教えてくれるという利点を有していました。それはさらに、都市を享受することからはじまり、住まい、家を享受すること、そして主体性を生産する自律性にまで、私たちがいかにしてたどりつけるのかも教えてくれるものだったのです。

しかしこの言説は、二番目のモーションで、都市全体、〈大都市〉がそれによって貫かれなければならぬ目的としての「生きる喜び」を主張することで、い

かにしてこの関係を逆さまにたどれるのかを示してくれたのです。だから、空間の生産の諸理論――都市空間全体を急進的に資本化する――に比して、私たちはルフェーヴルとともに、あまりにもいつも忘れられているある概念への要求、極めて重要な要求を手にするのです。それというのは、何よりもまず人間の集団性、出会い、知、喜びの場所としての都市の概念にほかなりません。もちろん、それはいつも突然変異するものであり、未完成なものです――しかし、都市において人間が生きる複雑さへのこのような認識は、団欒すること、住まうことの喜びから、都市全体の喜びへと至るまで投射されたものだったのです。とりわけ、近代的水準で機械化された、文明的に高度化された空間を享受したことのなかった新しい〈大都市プロレタリア階級〉（かれらだけではありませんが、特に移民たち）の大規模な層にとってそうでした。

この点において、最近読んだ小さなすばらしい本のことを思いだします。それはクリスティン・ロスの『コミューンのイマジナリー*L'imaginaire de la Commune*』[訳注6]です。パリ・コミューンの72日間の出来事についての語りは、続く世紀に、芸術、教育、文学において新たな知識と創作物を生みだすうえで重要なものでした。しかし、この本においては、それがいかなる出来事であったかを記録する以上に――そうですね、ロスはそれ以上に、その行為者たちの生の形式において革命的行為が反映され、それがたえず多数化される状況のなかで起こるとてつもない経験を記録しているのです。これは、想像力と幸福が、「感性的なものの再配分」（ランシエール流の）を引き起こすという経験にほかなりません。それは、都市の／における「革命の贅沢」として、その豊饒さと創造性のなかで記述されうるものなのです。

私は、従属する者、一般的には労働者の観点から、都市空間の生産について語るさいには、マルチチュードによる都市計画、つまり、マルチチュードの諸々の欲求と、特異性の喜びをともに考慮し、双方の総合体に有益なかたちで、都市を編成するというアイディアがしっかりととり戻されねばならないのだと考えます。私は、こうした要求が、何らのかたちで（すでに）主張されていると確信しています。また、こうも確信しています。都市の諸問題を、集団的なやり方で、幸福なやり方で解決しようとする統治される者たちの圧力に直面して、権力の側の要求は、イデオロギー的欺瞞と抑圧的な都市計画を採用するよう――だんだんとさらにもろいやり方で――強いられているということです。生と労働が重なりあうとき、都市／〈大都市〉の問題は、生態学と生産の重なりあいの問題として姿をあらわします。ここにこそ、都市空間の中心的な問題が存在しているわけなのです。「ここがロードスだ、ここで跳べ」ということですね。

トマゼッロ

さて私たちは、〈大都市〉空間が現代において創出、生産されるやり方のなかで、中心的な位置を占める言説装置にたどりつきました。それは「スマートシティ」の概念です。この概念は二面性を有するものです。それは、裕福な階級のもつ都市イメージを記述しようとするイデオロギー編成であるという側面と、この論理にしたがって、莫大な投資を物質的にもたらすという側面のことです。つまり後者は、資本主義の巨大な作業場としての都市の顔つきを描きなおす投資のことですね。

ネグリ

スマートシティについて論じられはじめたとき、最初はサイバネティクス・システム、それから情報工学システムによって完全に貫かれた都市のことと理解されていました。これらのシステムが、都市を全体において、何かしら再編成するに違いないというわけです。都市空間は、スマートで、知的で、頭のよいものとして定義されるわけですが、そこには、大いにイデオロギー的な二つの物語的要素があります。

問題となるのは、旧来の実証主義的な諸々の前提、機械論的で支配者＝経営者よりの19世紀的実証主義です。それに基づくなら、第一に、都市は完全に上から知ることのできるものであり、徹底的に、全面的に所有できるものであると考えられます。第二に、あらゆる都市的関係は、合理的あるいは情報工学的–サイバネティクス的手段を通して組織できるものと考えられます。これというのは、純粋にイデオロギー的な語りにほかなりません。

実際、この物語的要素、スマートシティとは、思弁的ではないときには、ただ単に売りに出すためだけのものです。つまり、それに値するよりも高い価格で生産物が販売されようとしているわけです。すべてを通り抜け、すべてに絡みつく頭のよさ――その宣伝が提示するものです――とは、現実には、制御以外の何ものでもありません――それは都市において展開される労働への制御であり、社会的搾取を行うために必要とされるのでしょう。さらに、それは統制のとれたプロセスを保証するのに必要とされ

る暴力を通じた制御でもあるのです。

私の意見では、スマートシティ、スマートランドというのは、まったくの欺瞞です。とはいえ、それらは、現実のプロセス、つまりコミュニケーションの流れによって、〈大都市〉構造のなかの労働に与えられる前例なき中心性と結びついたプロセスと混じりあっています。ただし、それは敵対性をはらんだやり方においてのことです。コミュニケーションの構造的レヴェルでの接続性が増大することによって、資本に直接に採掘される剰余価値が生産されると同時に、抵抗もまた生産されるのです——それゆえ、高次の欺瞞に依拠せざるをえない資本を攻撃する可能性が生産されるのです。

もちろん、それは意識を奪取する結果として与えられる抵抗ではありません。それは、日常において断絶をもたらす様々な要素の連続性、分子的行為の連続性として与えられる抵抗です。これらの要素は、都市生活の不安と結びついたものでしょう。きちんとした生を獲得するには、〈大都市〉の生活を揺り動かす必要があるのです。資本は、まさにこの〈大都市〉の生を、20世紀初頭にあった人口一万人の小田舎の静寂さへと切り縮めたがっているのでしょう。精神的な導きの役割は、教区司祭からテレビに取って代わられたわけですが、資本は〈大都市〉の生を、テレビによって新たに用意された静寂さへと切り縮めたいのでしょう。したがって、逆説的ですが、スマートシティは、「都市のハッカー」を必要としているわけです。また他方において、都市のハッカーがいなかったなら、〈大都市〉で生きる喜びを構成する抵抗と出会いの可能性が生まれることは決してないでしょう。

トマゼッロ

スマートシティのレトリックを反映する見解のなかに、私たちは、都市の周辺部、ファヴェーラ、スラム、バンリューをめぐる表象を見出します——バンリューという用語は、「追放bando」という封建的制度と関係していますが、私たちがその表象を見出すのは、この語源によって与えられた感情に訴える力の内側においてのことです。

以前のインタビューで、君は、労働／コモン的抵抗からなるこれらの場所の生産的特徴と、そこにおいて具体化する数々の抗争の重大性を強調していました。こんにち着手されている研究の軌跡にてらしてみて、この主題に何か付け加えることはありませんか？

ネグリ

これらの周辺部について論じるときに、たとえばマイク・デイヴィスのような重要な著者たちによって展開された調査、研究、意見のみを考慮に入れるだけでは十分ではありません。問題は、それらが本質的に、貧しい住民の外在性にねらいを定めた研究であるということです。これらの研究は、かれらの社会的危険性を、一方では、さらに強化される制御を誘発するものとして、他方では、これら孤立させられた場所における解放の装置としてみなすわけです。

それとは逆に、私が思うのは、これらプロレタリア階級の貧しい場所は、外部にあるどころか、都市生活と〈大都市〉における労働のコモン的性格——それは消去するのが困難なものです——を大いに示すものだということです。無権利やカーストの外について論じる、あまりにも多くの現象学が生みだされています。それらは、バンリューのなかに、全面的な排除が実行されている場所を見つけたと言うわけです。

バンリューにおける私の研究者としての経験は、いつも全体化を排除するよう仕向けるものでしたし、反対にいつも、労働する力の豊かさと、きまって創造力にあふれた共存と協働のクオリティを、私に示してくれました。これらバンリューは、資本主義的大企業によって定期的に吸収されては、定期的に拒否されるのです。大企業は、労働市場の観点に立ったときも、そこで生産される使用材——とりわけ、文化財、音楽、生活形式など——の観点に立ったときも、バンリューを包囲するのです。私たちはしたがって、統合と追放、吸収と排除のあいだのたえざる循環を目撃しているのです。

さらに言えば、蓄積された貧窮と反逆の惹起との狭間で、バンリューによって引き受けられる敵対的中心性を強調することが重要です。ここに剥き出しの生は存在しません。むしろ生政治的リズムは、ときに二律背反でもある（たとえば宗教／統合）数々の矛盾で満ちているのです——その内在性の領野においても、生は抗争に満ちており、爆発する準備はできているのです。

トマゼッロ

君は、現代の〈大都市〉にかんする言説の中心に採掘主義を位置づけていますね。多くの著者たちの仕事において、採掘主義の主題は、「いわゆる本源的蓄積」とマルクスによって呼ばれた現象のとぎれることのない特徴、決して完遂されることのない特徴

と密接に結びつけられています。そこにおいてマルクスは、無慈悲で残忍な収奪を通して、資本が「頭から爪先まで毛穴という毛穴から血と汚物をしたたらせながら生まれてくる」やり方を記述しているわけです。

現代の〈大都市〉において、価値の採掘過程に備わる[本源的蓄積の暴力と]類似する暴力の特徴を記述することは可能だと思われるでしょうか？　主格属格の意味において、現代〈大都市〉に固有の暴力とは、いかなるものなのでしょうか？

ネグリ

新自由主義的な制御の暴力についての、それだけではないとしても有力な主張は、現代のポストフォード主義的〈大都市〉のいくつかのイメージをゆがめてきたように思います。特に、本源的蓄積とのアナロジーが繰り返されているわけですが、それは大いなる誤解を生みだしかねないものだと考えます。

実際、一方では、私たちがここで語ってきた住まいにおける特異性の生産が、採掘メカニズムの内部、つまり、金融資本のサイクルに〈大都市〉が包摂されるプロセスの内部に完全に位置していることは明らかです。しかしながら、採掘主義に激しく対立する様々な応答、様々なエピステーメが存在していることもまた明らかです。「大工場」体制において、「実質的包摂」と呼ばれていたものが、こんにちでは、ばらばらに分解され、明らかな空間的不連続性、多数の時間的リズムとともに再びオープンにされているのです。

しかしながら、一般的知性からなる〈大都市〉において、新しい「本源的蓄積」、または「形式的包摂」をめぐる新たな出来事について論じるさいには、かなり慎重でなければなりません。なぜなら、もしそれが生じるのだとすれば、一般的知性の〈大都市〉のただなかで生じるから、資本の構造において／の最近なされたこの変転によって提出された諸条件の内側で生じることになるからです。

「本源的蓄積」と「形式的包摂」を思い起こさせる数々の現象が生じているとすれば、150年前に『資本論』のなかで、マルクスによって記述されたことの反復的な現象としてではなく、すべての成分が変更された新たなプロセスとして生じていることが強調されなければなりません。特に、一般的知性の〈大都市〉が、資本主義の暴力によって介入された現実であるというなら、こうした暴力は、生産的協働を構築するという必要性――領域[＝地域]に拡散する労働力からその諸手段を引きだすことで――によって押さえつけられ、弁証法的関係のなかに置かれるように思えるのです。資本主義の暴力は、一般的知性に対峙することで、また一般的知性の〈大都市〉において労働を組織せねばならない状況に対峙することで、数々の限界、やっかいな限界に遭遇するわけなのです。

警察的諸手段と文化的諸手段を――生産的かつ金融的諸手段に――融合させる暴力が行使されることで、制御が再編成されているのは偶然ではありません。根本的には、これは恐怖を生産するということです。恐怖は、それが引き受けるあらゆる形態のなかで増殖し、メディアを通じることで、とぎれを知らないものとなっています――おそらくこれは、現代の〈大都市〉のなかで行使されるもっとも大規模な暴力でしょう。他者の恐怖、伝染病の恐怖、汚染の恐怖などです。

採掘主義は、暴力の最新の形態（進歩的な意味において）に相当するのみならず、もっとも高次の形態に相当する――ただし、資本主義の暴力が先行する発展段階において手にできていたものを考えるなら、その結果においては、なおも不安定なものではありますが――ものとして理解されます。つまるところ、この暴力は旧来の物語と混同されてはならないということです。というのは、現在にまで至るプロセスのなかでは、マルチチュードの力もまた、資本にとって、その指令の行使にとって、いっそう気がかりで、いっそう危険なものへと生成しているからにほかなりません――特に〈大都市〉においてそうなのです。

トマゼッロ

『資本論』第一巻の本源的蓄積について書かれた第24章を作成する何年も前に、マルクスはすでに自然界のコモンが収奪されるプロセスに関心を示していました。かつての共有地で農民たちによって行われていた木材窃盗を取り締まる法律についての文章を書いていましたね。マルクスはそこで、使用というテーマを訴えかけ、人びとの慣習法を要求していたのです[訳注7]。

使用をめぐる問いを、コモンとの関係という観点からみてみましょう。この問いは、採掘による蓄積メカニズムによって刻印された現代の〈大都市〉テクスチュアのなかで、何かしら現在的な価値を有するものであると思いますか？

ネグリ

思うに、社会構成体は生産すると同時に、生産物、

生産過程の生産物でもあります。だから、コモンは採掘的搾取と同時に生じるのです。コモンは採掘的搾取を生産するものでもあるし、それによる生産物でもあるのです。

とはいえ君の質問は、私をある現実へと向かわせるものですね。私は、その現実についての知を、闘争を引き起こす装置として採用したいと思っています。それというのは、コモンは採掘主義に先行する、というものです。私はこのように規定、決定しようと思います。この視点からすると、コモンが存在しないなら、採掘主義が生じることはありません。社会の資本のもとへの「実質的包摂」は、この効果、労働のコモン化という効果を生みだしていると言えます。けれども、この労働は生政治的労働なのです。この労働は、コモン的となり、社会化され、協働的なものとなるほどに、つまりは価値を引き受けることになるわけです。

私たちは、本源的蓄積と「自然界」のコモンの収奪についてマルクスによって分析されたそれと比べると、逆さまになったプロセスの内部にいます。こんにち、資本主義的搾取の矛盾は、公的なもの、つまり、私的なものに指令された公的なものを通じて、コモンを収奪するという切迫した事態のなかで組織されているのです——公的なものは、もはや私有化に抗う防御施設、砦などではまったくありません。今や、アメリカの最高裁判所は、資本主義が発展する必要性のための収奪に正当性を与えているのです。すなわち、公的なもの（最高裁判所）は、私的なもの（この場合は、ある多国籍企業）が自分の成長のために、コモン（空間、活動）を収奪することを是認しているわけなのです。

かつては、公的なものは補填的なものであり、私的なものに対して補足的なものとなりえていました。つまり、私的なものが及んでいなかったところでは——建造物、鉄道、空港、学校、病院などを建設することにおいて——、公的なものがそれらを実行に移していたわけです。こんにち、こうした有益な大規模建造物——このコモンは自然のコモンを融合させたものです——は、公的なものから持ち去られて、再び私有化されなければならないというわけです。

さて、コモンはそれよりも力強いのでしょうか？　コモンはおのれを守ることに成功するのでしょうか？　私有化への直接の指令に抗って叛乱することに成功するのでしょうか？　その私有化の発展を遮断できるのでしょうか？　こんにちでは、ここが闘争の領域です。それはすでに傷つけられた領域ではありますが——ともかく、これが闘争の領域なのです。

トマゼッロ

〈大都市〉をめぐって三度にわたってなされてきた私たちの対話を、以下の問いで締めくくることにしましょう。それは「〈大都市〉の政治的なもの」の固有性を思考する可能性にかんする問いです。これはつまり、主体性とコモンが生産される現代的諸形態に基づいて表明される政治的行為、こうした「コモン」の総体のただなかにおける政治的行為の独自のかたちを考えるということですね。

ネグリ

こんにちでは建築家たちが、よりいっそう「状況のなかで動くこと」を考えているという事実が、ただちに政治的なことだと思います。いくつかのオペライズモの手段を社会的な視座から再読し、それらを自分の仕事のなかに翻訳しようと試みながら、建築学に取り組んでいる仲間（たとえば、ピエル・ヴィットーリオ・アウレーリとその集団）がいます。かれらは解放liberazione［自由への生成］の必要性、つまりマルチチュードの様々な欲求、さらにはその政治闘争の「お手伝いをする」という観点から、建築学を自己定位させることを目指しています。これまで、建築学が内包してきたこのお手伝いをするような特徴は、いつも不動産による強大な資本主義によって占有されてきたものでした。現在ではそれとは逆に、専門的な水準においても、コモン的諸規範にしたがって、建築物を建てる必要性が理解されているのです。

またそれによって、協働と自由、平等と連帯を促す可能性、資本が課すことを望む強制的な均質化から、その特異性にあふれた複数性のなかにある都市を引き離す可能性が理解されています。このような空間、これらの取り組みに基づいてこそ、たとえば数々の生態学的闘争は、自然を守ることから「森林憲章」[訳注8]へ、〈大都市〉のコモンを守ることへ、さらにはそれを構築することへと帰還するわけです。

資本主義的設計図へのオルタナティブを提出する仕事は、ここにおいて敵対性を有するものとならねばなりません。マルチチュードは、この領域においてこそ、物理的かつ都市民的形象としておのれを組織するのです。思うに——オペライズモのすばらしい教えにしたがうと——、闘争は資本主義的構造化にいつも先行します。つまり、こんにちの〈大都市〉領域では、弁証法的ではなく、敵対的であるこの関

係こそが、中心的なものとなるわけです。〈大都市〉は、社会闘争としての階級闘争の特権的な領域へと生成するのです。〈大都市〉は、実際に工場です。しかし、それは一般的知性の工場なのです。加えて、一般的知性の労働力は、栄光に満ちた労働者階級のそれと同じくらいに、躍動性、可動性、柔軟性にあふれたものなのです。

最後に。こんにちの〈大都市〉では、マクロなものとミクロなものが、機能的な関係の内部で調和すると同時に、激しい対抗関係にもあると言えます。私たちは、この事実を強調することから対話をはじめました。資本が〈大都市〉で作用するときに行使する支配の関係は、いかにしてオルタナティブな諸形態のなかで、抵抗され、中断され、転覆されうるのか。この問いを様々なレヴェルで考察しながら、話を続けてきました。さらに、固定資本への従属をいかにしてひっくり返すことができるのか。悲しい感情に基づいて生じる疎外に、抵抗はいかにして打ち勝つことができるのか。こうした問いについても、考察を行ってきました。

これらの考察によって、私たちは、都市／〈大都市〉のなかに、採掘的搾取が行使される基本的な場所だけではなく、抵抗の政治的再構成が起こりうる空間を識別するに至ったわけですね。要するに、〈大都市〉によって助長され、課されもする生産的協働、現在のテクノロジーの変容によって著しく強化される生産的協働は、搾取の特別な空間を構成していると言えるわけです――確かにそうでしょう。しかし、生産的協働に置かれたこの力点は、敵対的な組織化と根源的なオルタナティブの可能性を切り開くものでもあるわけです。

しかしながら、さらに興味深いのは、「〈大都市〉時代」の分析です。今や人類の三分の二以上が、極端に標準化された〈大都市〉的現実のなかで生きています。つまり、まさしく都市にかんしてマキャヴェッリによって記述されていた「獣」から「都市民」への人間の変態が、これらの空間において実現されることでしょう――より正確に言えば、実現されてきたのです。目下のところ、都市民たちは、自分が住まう場所の生産者として、再びおのれを見出さなければなりません。

都市の読解、構築、行為、そして都市における読解、構築、行為の鍵が、かれらの手のうちにある必要があるのです。搾取される生産者という条件から、創造的な生産者という条件への転覆は、自動作用では起こりませんし、自然発生的でもありません。しかし、不可能な道のりだというわけでもないのです。進むには険しい道のりではありますが。

これは、コモンであること、コモンのただなかで生きることのもたらす根源的変容に基づいてのみ可能となる道のりです。この道を進んでいくため、その行程そのものを革命的なものとするためには、数々の相互共生的な生の形式、社会的なものにかんするいくつもの労働組合、出会いと活動をもたらすいくつもの実験室を構築する必要があるのです。

それは〈どこで〉なのでしょうか？　〈どのようにして〉なのでしょうか？　〈大都市〉において、路上において、広場においてのことです。都市自治主義 municipalismo[訳注9]（つまり、都市自治において組織形成を行い、戦うこと）は、〈どこで〉を指し示すものだと言えるでしょう。それは漠然とした指摘ではありますが、しばしば非常に有益な標識となるのです。〈どのようにして〉に関しては、私たちにどう進めばよいかを教えてくれる労働者の様々な闘争の歴史があります。「経営者＝支配者に害悪を与える」ストライキを、都市の経営者＝支配者に害悪を与えるストライキへと翻訳すること。それは工場闘争とかつての社会主義の政治闘争を、採掘的資本を攻撃する数々の方法へと翻訳するということです。

そうですね、これが明日のコミュニズムの道のりです。これは、都市において、〈大都市〉においてのことです。クリスティン・ロスが思い起こしているように、革命的労働運動は、自身のエクリチュールを歴史へ刻印するための標識として、マルクスの先見を再び取り戻してきました。ロスの言うように、この先見を私たちが思い起こすのであれば、コミュニズムの道のりは、困難なものではないでしょう――現在では、私たち都市民が、私たちのエクリチュールの標識として、それを取り戻す番です。「労働時間が労働尺度であることをやめ、労働が富の尺度であることをやめるとき、富は交換価値の観点からはもはや測定不可能となるだろう。それと同じく、コミューンの思想家たちと同様にマルクスにとっても、真なる個人主義は、コミュニズムのもとでのみ可能だったのだ。各々の寄与を必要とし、それを認めるコミュニズムのもとで。というわけで、それと同じく、真の贅沢というのは、コミュナルな贅沢でしかありえないのだ」。

2015年6月　パリ

訳注

訳注1　一般的知性general intellectは、マルクスの『経済学批判要綱』のいわゆる「機械についての断章」(「固定資本と社会の生産諸力の発展」) で論じられている。それは、資本主義がより発展していくなら、機械に具現化された科学的・技術的な知、つまり固定資本に具現化された抽象的知が、生産過程からの自律性を獲得しはじめることで、それ自体が生産力となりはじめる状況を指摘する。労働者は生産の基礎的主体としてよりも、生産過程の脇にいて、それを監視・調整することとなり、生産力としての役割を喪失していくと考えられた。しかし、オペライズモは、この概念を独自のやり方で練りあげてきた。オペライズモの知識人たちは、一般的知性を何よりもまず「生きた労働」として把握した。知の生産と生産のあいだの連結は、機械体系のなかで使い果たされるものではない。それは、人びとの言語的協働のような具体的な協働のなかに現れるというわけである。これは生産的労働の非物質化であり、資本にとっての価値の源泉が人間の言語的、社会的協働に属するという状況である。一般的知性とは、個々人が有する具体的な知識、専門的・科学的な知識を直接的に意味するわけではなく、人間の思考する能力、記憶する能力、話す能力などの潜勢力の総体として理解された。

訳注2　この展示は、ハラルト・ゼーマンの企画で、1969年3月にベルン美術館で行われたが、「態度が形になるときWhen Attitudes Become Form」が正式な名称であると思われる。

訳注3　日本語では以下の文献がある。マリアローザ・ダラ・コスタ（伊田久美子、伊藤公雄訳）『家事労働に賃金を――フェミニズムの新たな展望』インパクト出版会、1986。所収された論文は、1970年代から80年代に、イタリア語で書かれたものである。

訳注4　住宅ローン被害者プラットフォームPlataforma d' Afectats per la Hipoteca（PAH）は、住宅危機への応答として2009年に草の根運動として形成された。アセンブリーを通して、実践的な知識を共有し、住宅問題の影響を受けるすべての人びとを歓迎する空間の創出を目指す。また、PAHは、政治家と銀行システムの責任をはっきりと示している。これは、被害者の恥や罪悪の感情を、集団的なサポートとエンパワーメントで、肯定的なかたちで変化させるよう導くものである。PAHは、直接行動を通して、立ち退きを止めたり、住宅危機の真摯な解決を見つけるよう、銀行や政府機関などに圧力をかけたり、空き家を占拠したりする。European Action Coalition for the Right to Housing and to the City, Resisting Evictions Across Europe, 2016, https://www.rosalux.eu/fileadmin/user_upload/resisting_evictions_across_europe.pdf

訳注5　アダ・クラウ Ada Colauは、バルセロナの住宅ローン被害者プラットフォームの創設メンバーのひとり。2014年6月には、2015年の地方選挙のために設立された市民プラットフォーム「グアニェム・バルサローナGuanyem Barcelona」のメンバーとなった。「グアニェム・バルサローナ」は、2015年2月に「バルサローナ・アン・クムーBarcelona en Comú」に変わった。2015年6月からバルセロナ市長を務める。

訳注6　Kristin Ross (Tradut par Étienne Dobenesque), *L'imaginaire de la Commune*, Paris: La fabrique éditions, 2015. オリジナルの英語版は以下。Kristin Ross, *Communal Luxury: The Political Imaginary of the Paris Commune,* London: Verso, 2015.

訳注7　カール・マルクス（平井俊彦、細見英訳）「第三論文・木材窃盗取締法にかんする討論」『マルクス＝エンゲルス全集』第1巻、大月書店、1959、126-172頁。マルクスによって、1842年に書かれた。

訳注8　森林憲章Charter of Forestのもとをたどれば、1217年にイギリスでヘンリー三世によって制定された法律にさかのぼる。それは、貴族による森林、耕作のなされていないあらゆる土地の私有化を禁じた森林の所有権にかんする法律である。ネグリは、森林、海や大気などはもちろん、住宅、食糧、芸術、人間の社会的協働による物質的・非物質的な生産物に同様の「憲章」が必要であると考える。それはコモンであり、所有されるものではなく、使用されるものなのである。Toni Negri, Comune (Cristina Moroni e Paolo Vignola, a cura di, *Piccola enciclopedia precaria*, Milano: Agenzia X, 2015), pp. 37-39.

訳注9　都市自治主義municipalismo、正確に言えば、新都市自治主義neomunicipalismoについては、EuroNomadeにおいても議論がなされてきた。たとえば、それはスペインの経験に影響を受けている。2011年の15M運動、PAH、そしてバルサローナ・アン・クムーのような運動のプラットフォームの形成、地方選挙での躍進。緊縮政策下で、都市は金融資本による採掘の対象であると同時に、新たな生の形式が再発明される場所ともなっている。様々に生起する住居への権利をめぐる闘争、社会福祉の防御と刷新、貧困化のなかでの相互共生的実践、ジェントリフィケーションへの対抗など。自律的な都市統治のいっさいが、ヨーロッパの金融権力のもとに従属させられ、抹消されようとする最中

で、さらには資本主義と民主主義の分離が明らかな状況の最中で、これらの実践、そして対抗権力の形成から、民主主義とその決定のあり方を再発明することが、都市自治主義には賭けられている。